

雷と神社、かんぴょう

このところ暑い夏が続き、東京の気候は沖縄並みになってきたのでは心配されます。
大気不安定な日が多く、突然、空が暗くなり大ぶりの雨が落ちてき、空がぴかっとひかり雷の音がします。

地表が高温、上空高くに寒気が押し寄せると、地表と上空の温度差が雷雲を発生させます。
雷雲から弱い火花が地上に向かって落ち、地面から雷雲に向かって強い電流が流れます。ゴロゴロ、ピカッ・・・は怖い！

雷は別名、稲妻ともいわれます。雷とそれに伴う雨は稲や農作物には欠かせない存在なのです。雷は稲の妻なのでしょう。
雷の字は雨が上にあり、下は田で構成されます。上空から雨が降ってきて田を潤す、これが雷です。

昔から日本の農家の人々は「雷が多く発生する年は、稲を中心とした農作物が豊作だということを知っていました」
雷が発生すると、空気中に窒素肥料ができ、それが地表に落ちてきて、農作物の肥料となっていました。
雷は農作物の成長を促しています。

神社の紙垂は雷を表す

日本全国、どこの神社にも「しめ縄」にギザギザの形をした紙(紙垂=しで)がぶら下がっています。
ギザギザに切り込まれた和紙は雷を表しています。

昔から日本の農家の人々は「雷が多く発生すると、農作物が豊作だということを知っていました」。

日本人は古代から神社に参拝し、雷の発生⇒稲、農作物の豊作を願っていました。



紙垂のもう一つの役割

「境界線」を意味していると言われている注連縄(しめなわ)という、藁(わら)の縄に、挿して、縄が目立つ様、「標識」の役割をします。

つまり、神様のいらっしゃる場所がとても清まっているので、「ここからは気持ちを入れ替えようね」の看板みたいなものなんです。



雷とかんぴょう

かんぴょう(干瓢、乾瓢)は、ふくべ(ウリ科ユウガオの品種)の果実をひも状に剥いて乾燥させた食品。
ウリ科ユウガオは、ヒルガオ科のユウガオ、すなわちヨルガオとは同名異物。水で戻して煮て寿司の具材や、煮物、和え物などとして使われる。低カロリーで食物繊維に富む。

栃木県は日本全国の「かんぴょう」の98%を生産している「かんぴょう県」です。かんぴょう生産が栃木県で定着したのは風土に因るところも大きいと考えられています。
夕顔は浅根性で横に広がって伸びる性質があり、排水のよい軽い土を好みますので、保水性が高く水はけもよい土壌(関東ローム層)に覆われたこの地は、かんぴょうの発育に何より適していました。また、このあたりは夏の名物といわれるほど雷が多く発生し午後には雨が降ります。これが地表を冷まして暑さに弱い夕顔の根の伸長を促し、実(ふくべ)を太らせる恵みの雨となってくれるのです。

南からの大気が、那須連山にぶつかり、上空の寒気とぶつかり雷が発生しやすい立地にあります。
雷と共に起こる夕立が多く、農作物が急成長する土地柄なのです。

「かんぴょう」はユウガオの実から作ります。ユウガオの花が咲いてから2週間ぐらいで7~8キロの実ができ、一つのユウガオの実から200gの「かんぴょう」ができます。



摂津国 木津(現在の 大阪市 浪速区)が干瓢生産の発祥の地といわれます。

1712年(正徳二年)に 近江国 水口藩 から 下野国 壬生藩 に(現在の栃木県 下都賀郡 壬生町)国替えになった 鳥居忠英 が、干瓢の栽培を奨励したことが、今日の栃木県の干瓢生産の興隆につながっている。

現在では、下野市、小山市、壬生町などで多く栽培され、国産かんぴょうのほぼ全量(98%)が生産されています。